

インタビュー〈戦後教育史のなかの和光学園〉—02

秋野勝紀

「たしかな力をつける保育」を求めて

語り手 **秋野勝紀** 元和光鶴川幼稚園副園長／元日本福祉大学教授

聞き手 **太田素子** 所員／現代人間学部教授

浅井幸子 所員／現代人間学部専任講師

秋野勝紀氏は1967年に国立音楽大学幼児教育専攻を卒業し、当時は希有だった男性保育者の一人として和光幼稚園に赴任した。67年、68年と2年間担任した後、69年からは部長として幼稚園の運営や対外的代表者の仕事をするとともに、カリキュラムの開発に力を尽くした。とくに幼児期の発達課題を見極め、それに必要な保育内容を積極的に指導する教育を推進した。また、全盲児の統合教育を描いた映画『みんなでうたう太陽のうた』の制作に深くかかわった。79年から86年までは、和光鶴川幼稚園の副園長をつとめている。インタビューは2010年8月11日、10月22日の2回にわたり、それぞれ約3時間行なわれた。以下は、そのうち保育内容を中心とする2回目のインタビューの要約である。テープ起こしを秋野氏にご確認頂き、加筆修正して頂いた。インタビューアーのコメントを後ろに添えておく。(浅井幸子記)



秋野勝紀さん

秋野勝紀プロフィール

1943年、北海道に生まれる。1967年、国立音楽大学教育音楽学科幼児教育専攻卒業。1967年より和光幼稚園に勤務。69年に同幼稚園部長となる。1979年に和光鶴川幼稚園に転じ副園長をつとめる。1987年に退職後は、日本福祉大学で教鞭をとる。編著書に『生活づくりと保育の創造』（駒草出版、1983年）、『たしかな力を育てる——和光鶴川幼稚園の12ヶ月』（明治図書、1984年）、『人間らしさを育てる集団づくり』（ささら書房、1986年）、『幼児保育学の初歩』（青木書店、1992年）などがある。

——子どもの行動範囲を広げ運動量を増やす

太田 1967年から和光幼稚園に勤務されたのですね。

秋野 当時、男性保育者はほとんどいませんでした。男性が幼児教育を専攻して幼稚園で担任となったのは、おそらく日本で初めてだと思います。学生時代から男性が幼児教育を学ぶことに好奇の目を注がれていると感じていました。幼稚園では短大を卒業した女性が数年働くというのが一般的でした。保育園は民間では資格のない人もいて、職業として社会的認知が確立しているとはいいがたい状況にありました。

一方では、保育の必要な親たちが共同保育所をつくり、それが認可保育園になっていく。もう一方で、都市では専業主婦指向が強くなり、あわせて就園率の高まりで幼稚園が足りないため地主が幼稚園をつくる、そういう時代でした。

はじめに担任をした2年間のことを、いくつかのエピソードを交えて話をします。学生時代に教育実習を3つの幼稚園でやり、授業で4つの園を見学に行きました。いずれも歴史のある幼稚園でしたが、子どもが制服を着ていて、それが汚れない程度の活動でした。外での遊びは遊具が中心で、その他は鬼遊びぐらいです。教師が走らなければならないような運動はしていませんでした。

新任の年に5歳児を担当しました。ぼくの保育では、砂場に水を入れて裸足になって遊んだり、運動場にできた水たまりに入ったりしました。大方の子どもは喜びましたが、当時は汚れることを前提にしていない、着替えも用意していませんので、そのような活動は和光幼稚園でも冒険でした。

当時は家庭で現在のように父親が育児にかかわるといことはありませんでした。ですから若い男性にわが子を任せて大丈夫か、と不安を持っている親がいたと思います。そういった親に信頼されることが必要と思いながら担任をしていました。少し気負いすぎかもしれませんが、ぼくが失敗したら、男性が保育を仕事とする道が開けないのではないか、とも思っていました。女性の先輩の先生に劣らないように子どもに気配りして、細心の注意をはらって仕事をしていました。平凡なことですが配布物は忘れず配る、教室の掃除をきれいにして整頓を怠らない、といったことです。それに洋服が汚れたこと、ぶつかってあざができたといったことなどでも、その都度連絡帳に書きました。

女の子の親から「子どもが先生と親しくできない」という声もありました。でもクラスの親和会で4月5月と子どもの園での様子を話したりして、「そんなに子どもを細かく見ているの」と安心する親も多くなりました。安心した親たちが、なんとなしに不安で質問する人に説明してくれることもありました。

ぼくは少しずつ自分の保育に確信を持てるようになりました。それで運動量を拡大し、自分の生活感覚を打ち出すようになったのです。和光幼稚園では降園時

に5つぐらいのコースで集団降園をしていたのですが、ぼくが担当したコースでは、以前は20分ぐらいかけていたのを10分余りで行くようにしました。裏道で自動車は通らないし、早足ぐらいの方が子どもは集中して歩きます。すると結果として時間が短縮されるのです。早く着きすぎて親が戸惑いました。3歳児には無理ではないか、という声もありましたが、「早くすることが目的ではなく、幼児はこのぐらいはできるはずです」と言って納得してもらいました。

浅井 それまでの保育は「生活感覚」に基づくものではなかったということでしょうか。

秋野 静的ないしは女性的な文化でした。保育は生活文化をベースにしているので、時代が反映されます。当時の親の学校体験は、父親は若い人で国民学校から新制中学世代で、年輩の人は兵士体験のある人もいました。母親は新制中学・高校の人が半数ぐらいでしょうか、あとは国民学校から高等女学校だったと思います。尋常小学校世代の人もいました。ですから今と比べると、性別役割分業を反映して、男女の文化の差がはっきりしていました。たとえば遊動円木に乗るとき、前後に揺れるので男の子はまたいで乗りますが、女の子は「女乗り」といって両足をそろえて横を向いて乗っていました。そうすると大きく揺れる面白い体験をしないのです。ぼくは「またいで乗った方が面白い」と言って、女の子の運動能力の向上をうながしました。ままごとをやっても女の子は正座のしぐさを崩しませんでした。水道を使うために順番に並ぶときでも、男の子の勢いにおされて女の子が譲って後ろになる、といったことも見られました。こういったことに対してぼくは、それとなく、男女の違いによって活動のチャンスや面白さの体験が異なるようにしました。発達の機会に男女差があってはいけない、と考えたのです。

当時は和光幼稚園でも、滑り台やジャングルジムやブランコが遊びの中心でした。外での遊びは少なく、室内でままごとや絵を描くことや粘土、それに折り紙といったところでしょうか。ああ、冬はこま回しもしました。3000坪ぐらいの敷地を幼小中高で共用していたのですが、運動場は普通の小学校の運動場の半分程度のスペースでした。幼稚園の教室がたまたまその運動場に面していたので、運動場での活動を多く持ちました。都市の住宅は活動範囲が狭いだろうから、幼稚園ならではの活動をしよう、ということでした。またぼくの問題意識のなかにも、幼稚園教育はこじんまりしすぎているというのがありました。幼児期の発達の到達点の設定が低いのではないかと。

運動場をいっぱいに使って走るような遊びをするようにしました。2学期だったでしょうか、バドミントンのラケットでゴルフボールを操作する遊びを考え出しました。フィールドホッケーと同じです。子どもたちに名前をつけさせたら、バドミントンのラケットで蹴るから「バドゲリ」になりました。いいネーミングに感心しました。3カ月以上続けました。

太田 今ならサッカーやドッジボールなど、大きなボールを使うゲーム遊びになりますね。ゴルフボールが浮いて当たったら危なくないですか。

秋野 ラケットを振り切らないで、押してボールが地面を這うようにし、グループ6人のチームでやっていました。コートは縦40メートルぐらいだったと思います。それをやったら格段の運動量になりました。

ほんとは教育実習でやったサッカーをさせたかったのですが、指導の内容を詳細に作れなかったので、導入は数年後になりました。ドッジボールはやりませんでした。ドッジは逃げるということです。ボール運動の基本はボールのコースを読み、そこへ向かうということですから、ドッジボールはその基本に反しているのです。それに子どもたちが沸き立つけれど、集団の関係性がありません。盛んに行われていますけれど、子どものボール運動のあり方として再考する必要があると思います。それから幼児期でもスポーツの種目をやっていいのではないかと考えていました。

——幼稚園の女性文化の問い直しと改革

浅井 いろいろと新しい試みをされたのですね。

秋野 当時の幼稚園は、女性の文化・家庭の文化に傾斜していました。そのまま踏襲すると、男性であるぼくは苦しくてできないです。それに幼稚園は家庭を補完するのではなく、相対的独自性を持った場です。男女にかかわらず、子どもの発達をうながす「学校教育」です。男性性を打ち出すことは、ぼくの独自性の発揮ではなく、性別に関係ない子どもの発達を公的に保障する場をつくることだと考えていました。

それに関して幼稚園独特の言葉についてのエピソードを上げておきましょう。子どもが「自由遊び」を終えて教室へ集まるのを指示するのを「お集まり」と言うのが一般的でした。これは、語頭に「お」をつけて動詞を名詞化するわけです。動詞は行動を表す言葉なので、名詞化すると言葉が貧困になる、という提起を職員会でしました。これはたまたまある本を読んで得た知識でした。「お集まり」という言葉を使うことに抵抗があったので、ちょうどいい理論だ、と思ったのです。

保育では言葉の語頭に「お」をつける美化語が多いのです。大正の童謡運動の口語文でたくさん使われたような言葉です。おそらく東京の山の手言葉なのでしょう。戦後の子どもの歌でもありますね。保育で美化語を多用するのは、物事をリアルに言うのを避け、遠まわしに言う言語文化であるのかもしれませんが、いずれにしても語頭に「お」をつける言葉を使うのは、ぼくの言語文化からしてしっくりこないのです。

言葉のことで、毎月歌う「誕生会の歌」を作ったときに、こんなこともあり

ました。

○月に生まれた○○さん 誕生日おめでとう (みんな)
ありがとう ぼく (わたし) はね 6歳になったんだよ (誕生の子ども)
もっともっと元気ででっかくなろうよね (みんな)

こういう歌詞の歌だったんですけど、ある女の子に「でっかいってわるいことばです」と言われたんです。ぼくはあわてたものでした。しかしちょうどその頃に、子どもが日常使う言葉を詩にした歌が出始めたのです。

朝のあいさつの歌、弁当の歌、帰りの歌といった一斉行動開始のときのサインとしての歌は歌いませんでした。音楽を行動をうながすサインとして手段化するのは音楽本来の意味をゆがめるので良くない、という問題意識がありました。おしゃべりしている子どもを見つけたら「おしゃべりする子は誰でしょう」とみんなで歌い、該当の子どもを「○○です○です○ですよ」という歌なんかも歌われていましたが、先生の代わりに子どもから圧力をかけさせるのはどうかと思っていました。言葉で注意をうながした方が、子どもが理解できるはずですね。

それから、子どもを集める時には、常に整列させるのが一般的でしたが、それもやめました。24人の子どもですから、特別などき以外は整列する必要がないと考えたのです。整列に時間をとると、むしろ自律的行動を弱めることになるのではないかと。

これらの改革は、単なるぼくの嗜好からきているわけではありません。大学で伝統的な幼児教育について学び、自分でも50を超える園を見学しました。後の教育実践で新しい試みをするときに、そのことによって説得力のある提案ができたと思います。

先輩の先生たちは、ぼくの実践にクレームをつけることなく、寛容に見てくれていました。当時の部長は小学校教員から幼稚園に転任した方でしたから、それ以前のことにはとらわれていませんでした。ただ新しいことをやると、どうしてなのかと理由を尋ねられました。自分では意味づけを用意していましたし、それを確認することにもなりました。そのようなめぐまれた職場環境で出発できたことは、その後の実践にも大いに励みになりました。

——改革に舵を切る

浅井 担任は2年で終わるんですね。

秋野 職場の事情から3年目で部長になりました。担任で実践することを熱望し、それに喜びを感じていたので、空虚感を持ちました。職場は変わっていなくても、質の違う管理運営の仕事をするのですから、頭の切り替えが大変でした。教員み

んながぼくより先輩だったのですが、励まされながら仕事をしました。親にとってははらはらだったと思います。

1年目の大きな決断は、3歳児を16人ずつ2クラスに拡大したことでした。当時3年保育は一般的ではなく、和光幼稚園でも4月は10人あまりで、2学期半ばから20人近くになるという状況でしたから、相当な冒険でした。理事会も難色を示しましたが、ぼくは社会動向に先んじてやったほうが幼稚園としての力になると思っていました。次年度の4月には定員にわずかに足りませんでした。1学期中には16人2クラス32人になりました。それ以降は3歳児から2クラスと園規模が確定し、入園希望者が増大していきました。クラスの規模と定員の安定した確保は、確信を持って教育づくりを推進するための重要な条件なのです。

部長という立場で初期の頃に改革したことで印象深いのは、持ち物の変更です。女の子の帽子に赤いラインが入っていたのを取って男女同じものにした。それから女の子の鞆が赤色だったのを男女一緒に紺色にして、A5サイズが入る大きな物にしました。これらのことは今だったらささやかなことですが、当時は男物と女物は別というのが標準だったので独自の発想でした。それから活動しやすくという意味で、女の子も原則半ズボンとしました。こういったことは今だったらジェンダー平等というのでしょうか、男性保育者から見ると不必要な男女差を解消しようという問題意識でした。

さて、担任を持っていないぼくは、機会を見ては保育にかかわりました。休んだ先生のクラスの代替で保育をするのがうれしかったです。最も関心があったのは、幼児期の運動・体育活動でした。家庭と違った公教育として幼稚園の独自性をはっきりさせられるし、幼児期の発達のベースをつくれると思ったからです。学校体育研究同志会小学部会の例会に、先輩の先生に誘われて出席し、大いに学びました。幼児期の運動のあり方と活動内容などを構想することができました。幼児期の運動能力要素として、ボディバランスが中核になるとわかり、その要素を強く持っているスケートとサッカーを幼児期に本格的にやらせたいと思いました。幼稚園教育であっても「子どもだまし」であってはならず、本物を幼児が学習可能なように活動内容を噛み砕いて提示し、子ども自ら獲得できるように、という思いもありました。

スケートですが、実施するには先生たちの同意が必要です。そのためには、ぼく自身のスケート技術を確かなものにしなければなりません。一人で赤城山のリンクで3日間滑りました。千葉大学の学生の合宿に入れてもらって、1万メートルを滑ったりしました。それからスケートリンクに通っては、リンクの手すりにつかまりながら滑ろうとしている人を観察しました。スケート連盟の初心者向けの教則本も読みました。スケートの中核の技術は片足に体重をかけてその移動で前進するということです。ぼくの指導はそれを出発点からやりました。陸上で体重移動で歩いてそれを氷上に移していく。その独特の歩き方を「デンデン歩き」

と名付けました。

スケートリンクは園から歩いて10分あまりのところにありました。講習会を開いて先生方もできるようになりました。最初の頃は午前保育が終わる曜日に全員で5歳児の指導にあたりました。やがて親に指導者になってもらうために講習会を開きました。親の指導者が何年か経験をつんでからは、5歳児以外の先生はかかわらないかたちにしていきました。子どもに技術の段階を示して、自らその筋道にそって到達できるようにする「段階別指導」を行いました。1回1時間ぐらい6回やると、バックやクロスができるようになる子どもが三分の一ぐらいになりました。

浅井 とくに幼児の運動・体育に関心をもっておられたということですから、運動会のこともお聞かせください。

秋野 運動会は既成のものにとらわれないで、走る、跳ぶという運動能力を発揮させるものにしました。勝敗で競争をあおるようなこともしませんでした。弁当を食べるのをやめて、9時から2時間半で終了する。走る跳ぶ運動を公開して子どもの発達を考える場にしたいといっています。大勢で集う喜びを共有できればという意味で、全園の野外劇を行いました。3、4、5歳児160人がするので、「おおきなかぶ」「三びきのやぎのがらがらどん」「かにむかし」を選び、友人の繁下さんに曲を提供してもらいました。入場門退場門をつくらず、1カ所だけにし、プログラムになったら子どもの席から出て行き、終わったら門を通過して座席につくといったかたちにしました。

トラックの大きさは、試行錯誤を経て、幼児期としては大きめの90メートルに落ち着きました。5歳児が全員リレーで一周しますが、大人でいうと中距離走といっているものです。短い距離だと速い子どもに遅い子どもが太刀打ちできなくなります。ところが90メートルにすると、ペース配分などの要素が入るため、遅い子どもとの差がつかなくて対等に走れるのです。5歳児の走り縄跳びは、70メートルぐらい走りますが、これもほとんどが接戦になります。運動会は走るという運動能力が飛躍的に向上する体験になります。

浅井 水泳の指導についても聞かせてください。

秋野 幼児の水泳については、当時未開拓だったのですが、みんなで実践に力を入れました。学校体育研究同志会が水泳の初心者指導に「ドル平泳法」ということを提唱していました。これは呼吸法を中心にして指導すると多くの子どもが浮いて泳げるようになる、そこから各種の競泳の泳法に行くという方法です。ぼくたちはその幼児用のプログラムを作りました。やはりスケートと同じ「段階別指導」です。この「段階別指導」は、到達点で選別してあとは子どもの努力にゆだねるということではありません。子ども自身に自分の課題が分り、その指導責任については教員が負うわけです。活動内容を明らかにし子どもの個人差に応じた指導をする、その実践を教員が共有するので、教育の喜びを教員集団で味わうこ

とができました。

小中学校のプールができてからは、それを活用できたので、相当成果が上がりました。コースロープを縦に使うて70センチの浅いところを3歳児が使う、5歳児になると胸の辺りまでのところといった具合です。水深によって水への恐怖心が違いますし、胸ぐらいの水深が一番伏し浮きがしやすいのです。プールの条件がよくなったら、5歳児で三分の二ぐらいの子どもが10メートル以上泳げるようになりました。子どもは自分の変化発展が自覚でき、それが幼児期としての確信になっていくのです。

浅井 数年後に導入されたというサッカーについても、お聞かせください。

秋野 5歳児がサッカーをやりだしていました。ぼくは内容を理解して幼児用の指導プランを作りたいと思ったので、自ら川崎市のあるサッカークラブに入りました。運動経験のないものにとってつらかったのですが、半年ぐらい続けました。

サッカーはボールのコースが分かるし、足での操作や走ることなど幼児期に育てたい運動能力の要素が含まれています。当時サッカーは今ほど盛んではありませんでしたが、幼稚園で盛んになり、お母さんたちのクラス別対抗試合をやるほどでした。サッカーというスポーツ文化に優れた点があるからでしょう。詳細な指導プランも作りました。個人のボールの扱い方、2、3人でのパスなど試合を想定した内容、そして試合という3つのジャンルを発展させていくのです。ゴールはハンドボールのサイズで高さを170センチにしたもの、ボールは3号の皮製を使いました。ドッジボールのボールだと弾みすぎ飛びすぎで、子どもがボールを支配できなくなり、技術の向上に難点があるのです。

余談ですが、幼稚園を卒業してもサッカーを続けられないかという声があり、サッカークラブを作りました。最盛期は中学生も含め150人以上のメンバーで、学生を中心にしたコーチ10人ぐらいでやっていました。15年間やりました。日曜日をそれに費やすのは辛かったですが、幼稚園に対する信頼の高さの現われだと思って、ぼくはやっていました。

——発達課題に即したカリキュラム開発

太田 「段階別指導」というお話を伺いますと、自然発生的な子どもの遊びの世界とは相当距離のある指導方法をとっていたと思われませんが、その点はカリキュラム全体の構造と関わりがあるのでしょうか。カリキュラムについてお話しください。

秋野 ぼくは研究に対する提案にもっとも力を注ぎました。

前提として「早教育」と「早期教育」を区別して考えていました。早教育は英才教育あるいは早期能力開発教育で、年齢の高い子どもの学習を幼児期の行動の特徴をとらえて効率よく指導するということです。井深大が提唱していました。それをぼくは強く否定して「早期教育」が大事だとしました。早期教育とは早い

年齢、つまり低年齢から発達課題に即した教育は大いにやるべきだという考えです。当時は発達課題に即した教育を積極的に行うことの重要性を主張する時、「早教育でなく早期教育」と言うことに意味があったのでした。現在はぼくがかつて早教育といていたものを早期教育と呼んでいます、本当は区別した方がよいと思います。

伝統的な保育として、子どもの自発性を尊重する、いわば自然な成長をベースにする考えがあります。今でもその考えは主流といえるでしょう。しかしぼくは、子どもの自発性自体が社会的に作られるものである、つまり教員が意図を持って知的好奇心や行動を誘発するように働きかけることによって表面化するものだと考えています。子どもの自発性があたかも自然に湧き出てくるかのように考えると、教員が子どもの自発性幻想にとりつかれて、子どもが主人公の保育をしたという落とし穴にはまってしまう。子どもはリアルな発達の課題と可能性に向けて生活する存在なのです。それに子どもの自発性幻想に陥ると、教員が共同で実践研究をする力が弱くなってしまいます。

自然な成長をベースにする保育に対して、早教育を大雑把にやる園もありました。それは伝統的な園よりも、就園希望者が急増する中で出来てきた新興の幼稚園に多かったです。これらの園はビジネス的な発想で、話題性のある保育をして目を引くことをします。「はだし保育」「はだか保育」「ワークブックで小学校の学習をする」といったことで特徴をだそうとしたので、ぼくはそれらを総称して「目玉保育」としていました。

これらの2つの傾向に対して、第3極とでもいいでしょうか、早期から科学的に発達課題に即した教育を推進しようと思いました。すでに述べた運動・体育の実践はそのような考えに基づいています。当時はピアジェの心理学が手に取れるようになっていました。勝田守一の『能力、発達、学習』も何回か読みました。日本生活教育連盟に参加していましたから、川合章の本もほとんど読んでいました。ぼくは部長という立場でしたので、小中高の教育にも関心を持たざるを得ませんでした。ですから、ぼくの中には幼稚園の現場を学校教育としてみている感覚がありました。保育というものを俯瞰しながら現場にいたのかもしれない。

発達課題にそった保育の話を具体的にしましょう。当時は保育の研究者が保育内容の全体構造をチャートで提案していました。研究者としては理論の整理としての意味があるのですが、そのまま現場で使えるものではありませんでした。そこで自分で実践可能な全体構造を提案しました。それについて詳しく述べることは他にゆずるとして、課業のことに触れておきます。課業の前提として、基底になる生活、中心になる活動、総合活動という層の活動がありました。課業はいわゆる一斉保育でやることが多いのです。保育形態は活動内容によって様々用意されるべきと考えていましたので、課業の場合も活動にふさわしい形態でよいのです。

幼稚園の課業は、小学校の教科とは異なり、文字や数字を介さずモノを操作する作業などの行為を通して体験的に学習していきます。教科の前段階の内容です。したがって幼児期の発達課題に即した具体的な内容を、小さなステップを踏みながら用意しておく必要があります。幼児期とくに4、5歳児からは遊びではなくくれない特定分野の活動に分化することによって、文字や数といった記号を操作しなくても学習が可能です。

数・量の研究はぼくが就職した頃、学内の高校以下縦割りの研究会をやっていたので、高校の先生が幼稚園の内容づくりに協力をしてくれて、教具を作って5歳児には実践をしていました。

言葉・文学は、必須に扱う絵本の作品分析を何人かで試みていました。文学教育はどこが到達点かが難しいため、発問などについて試行錯誤していました。文字の指導は、5歳児ではひらがなの読みを到達点として、木の文字カードを独自につくったり、絵カードを専門家に描いてもらったりして教具を作りました。内容は当時出ていた文字の初期教育の本を読んで、ぼくがつくったものです。文字は言葉を自覚化抽象化する過程で獲得するものなので、5歳児の音韻抽出では同音異義語を扱った言葉遊びなどが有効です。ですからそれに関する絵本も使っていました。

体育・運動については、たとえばなわとびをできるようになるにはどのような運動能力が必要か、ということを明らかにしました。研究会に行くと「最後〇〇ちゃんはみんなに励まされてできるようになりました」といった報告があるので。しかしぼくは、励まされてできるようになるのではなく、なわとびができるようになるための技術があり、それが分かれば多くの保育者が指導できるはずだと考えました。小学生の授業を見て、つまずいている子どもをヒントにしました。なわとびの技術の中核は、一定の拍で跳ぶことと手足の供応動作です。それで3歳児ではひざぐらいの高いところから足をそろえて着地する、4歳児ではケンパー跳びやグーパー跳びの遊びをすると、結果としてそこで培われたことがなわとびにつながっていくのです。そうやって4歳児の秋に全員飛べるようにしました。一定の拍で飛べない子どもの場合は、肩幅ぐらいに左右にラインを引いて、それを見てライン上に両足を広げて閉じるということを繰り返すとできるようになります。縄を前にたたきつける場合は、両腕の後ろに力を入れて背中をまわすことを意識させます。完成したなわとびは縄を手首で操作しますが、初期の段階では腕の付け根からまわすことを意識させると縄が絡みません。

描画・造形は新しい絵の会の理論を取り入れていました。そこで幼児期の分野を中心的にやっていた先生がいました。観察、生活、想像という分野を設けていますが、モノの認識とそれを表現する技術を順序を追って体験させるということでしょうか。画材は絵具を多く使いました。この分野では木工、ゴム版の版画もしました。木工では3歳児で釘を打って木と木を接合します。4歳児ではあ

らかじめ教員が用意した木片を使って船を作ることをしていました。

—— 公開研究会「たしかな力を育てる」

秋野 カリキュラムが作成され、実践が蓄積されたので、72年に公開研究会を開きました。午前に保育を公開し、午後にそれをめぐって討論をするのです。テーマは「たしかな力を育てる」としました。早教育を批判しつつも、子どもの発達課題にあった保育を積極的にするという考えを込めました。規模はたしか150人としていましたが、申し込みがオーバーしてしまいました。若いぼくが中心だったので、学園として心配だったのでしょうか。理事の春田先生があいさつしたり、他の部の部長に役割を担ってもらったりしました。

参加者からすると、子どもが活気を持って遊んでいたり、幼児期では難しいのではないかと思われることをやったりしているので、驚きを持った人が多かったようです。それまで保育界で各年齢の到達点と思われていたところより高いものを実現している一方で、子どもたちが自由で自律的に行動する姿がありましたから。和光だからそのような実践ができるんだ、という人が多かったかもしれません。特別な子どもを集めている、と。ぼくたちは簡単にそのような実践をしていたわけではありません。日ごろからカリキュラムづくりと実践とその検討の努力をしていたからこそ、そのような実践が可能だったのです。

「幼稚園教育要領」にあるような子どもの自発性に依拠した自然成長論の保育に対する批判も込めて問題提起を行いました。その教育は、親の関心と満足度が高かったので、確信を持っていました。子どもに無理をさせず、手が届きそうな抵抗のある活動を子どもに用意する。それをクリアした子どもが、自分の変化発展に気がついたとき、本当の人間的な喜びになるのです。少しの困難を乗り越えることによって、喜びと人間としての誇りが醸成され、更なる挑戦意欲がわいてくるのです。

—— 総合活動

太田 教師の意識的な指導ということであれば、最近改めて幼児期のプロジェクト活動が注目されています。和光幼稚園の総合活動は伝統がありますね。次に、総合活動についてお話し頂けますか。

秋野 総合活動は、あるテーマに対して教員がプランを持ちながらも子どもの発想を掘り起こし、ともに作り上げる活動です。図式化すると、テーマの提起→子どもの関心にそって絵本で調べたり見学する→話し合い→必要なものを作ったり行動する→遊びなどの活動→集約的話し合い→遊びなどの活動、と繰り返して発展させ最後は行事などにして収束する、というように進行していきます。プラン

を持ちながらも、いかに柔軟に子どもの発想を活動に取り込み、子どもの主体的意欲を基に活動を展開させていくか、教員にとって面白くもあり難しくもある実践です。テーマは動物、電車ごっこ、劇づくり、それに冬の子ども会も入るでしょうか。そのなかで5歳児が1月ぐらいかけてやる大掛かりな総合活動「電車ごっこ」についてふれておきましょう。

様々な経過を経て、子どもが7、8人ぐらい乗れて、動く大きな電車をクラスで2台作るようになりました。電車の製作を始めるまでに、まず乗り物に乗った体験を交流します。移動は車が主で、公共交通を利用した体験が少ない子どももいます。遊園地の乗り物に話が広がる場合もあります。それらを集約してごっこ遊びをし、遊びがどうだったかの話し合いをします。5歳児ですと、役割の検討をしたときに、他の役割との関係はどうかといったことにも話が及びます。

それから慣例になっている電車を作って、3、4歳児にお客さんとして乗ってもらいます。電車ごっこを幼稚園の子どもみんなでやろうというふう集約して、電車作りの作業に入ります。子どもたちが乗る電車なので、構造上もそれに耐えられるものでなければなりません。ですから教員から子どもに構造が分かる模型を示します。これは作業がどこまで進行したか、今何をやっているかが子どもにわかるためにも大事です。子どもたちは3歳児の頃から木工作を体験しているので、のこぎり釘打ちの技術はある程度あります。電車づくりでは作業が飛躍的に多いので、完成時にはいっそう熟達します。製作だけで1週間余りかかります。出来上がると、すぐ動かして乗って喜びの歓声上がるほどに達成感を持ちます。ペンキを塗って完成させてから、遊びの役割分担をします。お客さんである3、4歳児の利用を想定して、全園の電車ごっこを構想します。そして2、3日電車ごっこをします。総合活動は途中で話し合いをしますが、その時は担任が気づいたことをテーマにしたり、望ましい方向で行動した子どもの行動を着眼したりする目を持っていなければならないのです。その辺が担任の力の発揮のしどころです。伝統的になっている活動を、子どもたち自身の活動として新鮮な思いをさせる。

浅井 総合活動は毎年テーマが決まっていると、マンネリになる懸念があるという考え方がありますね。

秋野 先ほども触れましたが、保育では子どもの自発性があたかも自然に湧き出るかのように考える傾向があります。そうではなくて、実践を蓄積して活動内容が精選されているテーマを担任が構想として持っていて、それを少しずつ提示しながら、そのときに構成された子どもたちの発想をとり入れて、子どもが発見したように進めていくと優れた実践になるのではないのでしょうか。ですから教員集団で共有されている内容に、その年によって修正があることもあるでしょうし、内容が同じでも子どもの自発的で主体的な取り組みに持っていくことも可能です。子どもに依拠するという名目で、子どもの発想に引きずられて目先だけ変わった

実践をするより、吟味された内容で伝統化されている内容を堅実に実践する方が価値があるとぼくは考えています。形骸化し伝統にしがみつくのではなく、伝承された内容に常に新しい血を入れて、価値あるものを新鮮に引き継いでいった方がよいでしょう。社会的評価の高い教育は、そんなに目先を変えないものです。

70年代半ば頃からは、教育内容の精選ということを課題にしていました。良い実践をした教員のものを継承しようとしめますから、だんだん内容が膨らむわけです。「どうぶつ」のテーマなどは5歳児の場合は動物園のパノラマ作りに傾斜がかかっていきました。思い切ってその総合活動をやめたらどうか、という提案をしたこともありました。しかし子どもの関心が高く意欲的なものは捨てがたかったですね。

—— 民間保育研究団体とのかかわり

太田 保育内容の研究に際して民間の保育研究団体との交流もあったのでしょうか？

秋野 公開研究会に対する関心が高いのは予想できていました。ぼくは川崎市や武蔵野市などの保育研修にかかわっていましたが、保育雑誌、婦人雑誌などに文章を書いたりインタビューを受けたりしていましたし。

講演もしていましたが、話がうまいとはいえないし、実践の話では多くの現場の人にとってはイメージが描けないようで、しっくりいかないことが多々ありました。そんなこともあって、8ミリで撮影して20分ぐらいに編集をしたものを持ち歩いて、ビジュアルで訴えるようになったのです。それが説得力を持ち、見た人たちが方々で話をしてくれて広がっていったのです。8ミリは編集に相当手間がかかりますが、多くのドキュメンタリーをつくりました。

保育運動とのかかわりでしたね。ぼくは学生時代から東京保問研（東京保育問題研究会）に入っていて、合宿に行ったことや例会に出たこともありました。ほかに主要なものとしては、70年半ばまで日生連（日本生活教育連盟）に所属し、事務局や月刊雑誌『生活教育』の編集実務をやっていたことがあります。企画づくりへの参加、原稿依頼、催促、そして割付、校正など全てをやりました。原稿に穴が空いた時の手当てもやるのです。草土文化から出版していた時代で、細かい割付や最終校正は会社の専門の人にやってもらいました。月刊ですから、出版社に出かけて行って仕事が深夜に及ぶ時もあり大変でした。でも小中高の先生の原稿を熟読する機会になりましたから、幼稚園教育の枠を超えて教育を理解し考える機会にもなりました。

太田 乳幼児研にもかかわっておられますね。

秋野 日生連の乳幼児部会をやっていましたが、ある時期から保育関係の参加者が増えて全体の30%を占めるようになりました。そこで分離独立する案が浮上し、

やがて乳幼児研（乳幼児の生活と教育研究会）が発足しました。和光幼稚園が中心で、軌道に乗っていたときは機関誌を出し、例会を月1回、それから夏の研究集会をやりました。研究集会のプログラムには、分科会以外に実技と音楽会を入れ、教育関係以外の人を講演に呼んだりしました。参加者が300人を超える時もありました。

——ダンボール遊具の試み

秋野 74年ぐらいから5年間ぐらいでしょうか、武蔵野美術大学のある授業でダンボールを素材に遊具作りをするというので、和光幼稚園で場を提供しました。ダンボールという素材が果たして遊具になるのか、という不思議な思いを抱きながらかかわり始めました。初期の頃は大学へ行って、幼児の家具や遊具について実態を知り、イメージを持ってもらうために授業をしました。

美大生なので驚くべきデザインの模型を作るグループが多くありました。ところがひとつの遊具にいくつもの構想を盛り込み、しかもデザインが先んじるため、実用性に乏しいものが多かったです。ぼくはテーマをひとつかふたつにしぼり、シンプルなデザインのものにするよう指摘しました。テーマは「もぐる、よじ登る」あるいは「揺れる平面」といったものです。何度か指摘すると、見事に変わります。テーマがはっきりしていて、デザインもシンプルになり構造上も無理のない作品が多くなりました。

ダンボール遊具は優れモノでした。数枚貼り付けて作るので物によっては1年以上持ちます。もぐる遊具の場合は、大きすぎないで、体と体が触れ合うぐらいが良いですね。遊具や子どもの建築あるいは物的環境のあり方を考える上でいい経験になりました。

遊具では、園遊具としてオーソドックスな大型箱積木について触れておきましょう。市販されているものは、カツラという軽い木材で作られています。それを重くて硬いカシ（あるいはナラ）で特注して作りました。カツラの3倍あまりの重さで、大きなものは一人で持てないほどです。なぜそのようにしたかという、子どもにちょっと抵抗感のあるものを与えるということでした。カシのものは重いので重ねると崩れず、触れても簡単に動かないので、囲うと部屋にして遊べるのです。

——遠距離での合宿

浅井 夏の合宿についてお話してください。

秋野 部長になった年からそれまで箱根で1泊だった夏の合宿を、群馬県のみなかみ町の湯檜曾温泉で2泊やることにしました。小学校から幼稚園に1年間だけ

異動してきたベテランの先生の紹介でした。下見にいくと、山歩き川遊びと子どもにとって日常と隔たった自然体験ができます。それに土合駅が地下にあるので486段の階段を登って駅舎にたどり着く。遠くまで行く価値があると判断しました。

活動内容の構想を練ってから、慎重を期す意味と行き届いた合宿するために、教員全員で実際に行ってみました。親の理解は重要ですから十分な準備をしたのです。合宿のねらいを検討して変更しました。それまでは親元を離れて泊まるということに関心が向いていたのですが、すると親子ともどもそれにとらわれてしまいます。そこに触れないで、合宿地でどんな活動するかに焦点を当てました。日ごろ体験できないようなこと、たとえば川の水を飲むことや、子どもだけで食べたり寝たりすることです。

事前の準備は綿密にしました。子どもには合宿準備とは言いませんでした。歩く力をつけることと子ども相互が関係を持って行動できることをねらって、6月に遠足を多くしました。7月になると排便について学習し、毎朝の排便と体調に関心を持てるようにしていきます。それから合宿のための歌を2曲づくり、歌いながら期待感を持てるようにしました。親から離れることよりも、合宿での活動に対する関心を高めました。

—— 障害児の統合教育

浅井 映画『みんなであうたう太陽のうた』についてお聞かせください

秋野 全盲の子どもの統合教育のドキュメンタリー映画ですね。あの映画は、ぼくの作った8ミリを見た映画カメラマンの保護者（黒澤映画のカメラを回した人でもある）が、監督の中村さんにその話をしたのがきっかけでした。記録に残す価値のあるものだということで、撮影を始めたのです。制作の細部にわたってかわりましたが、当時は極めて珍しい障害児の統合教育映画であるとともに、「子どもの可能性と教育の力」を表現する保育活動のあり方を提示しています。

撮影して2年後に完成させ、16ミリ映画ですから15万円で販売しました。社会教育映画として公民館や図書館などに数十本は普及したのではないのでしょうか。「朝日新聞」の文化欄でも全面スペースで取り上げられました。当時障害者教育の運動をめぐる政治問題化していたので、映画のテーマがある立場のグループから批判されるのではないかと懸念していましたが、そのようなことはありませんでした。視覚障害の教育の専門家からは、全盲の子どもがスポーツをすることや話す相手のほうを向いて話していることについて驚きの声を聞きました。

太田 障害児の受け入れはどのようにしていたのですか。

秋野 ぼくが部長になってからは、1クラス1、2名の障害児を受け入れていました。当時障害児は集団保育を受ける機会がないといってもよいぐらいでしたか

ら、新しい試みをしてみようと考えたのです。教員の体制の問題もありますので、個別に指導するにしても通常のクラスの保育と接点を持てる子どもを受け入れていました。職場でも障害児教育について学びました。そのうち養護学校の教員をしていた人を職場に迎え、その人に中心になってもらいました。障害の種別では、聴覚障害以外は全て受け入れました。幼児期の聴覚障害児は見よう見まねで園生活をするので受け入れやすいのですが、専門教育機関ではありませんので、言語獲得時期を逃すと大変なことになりますから。

—— 親に支えられて教育が発展

秋野 当時は若さもあって、新しいことをやれば実現する面白さがエネルギーになりました。大学時代に伝統的な保育について学び、多くの園を見ていたことが、新しい試みをするのに役立ったと思います。伝統的な保育を相対化して、緻密な理論による仮説で裏付けられた計画と周到な準備をもって実践していました。保育や教育は意味づけが必要ですが、伝統的な保育は経験的にやっているもので、それが弱い場合が多いのです。なぜと問いかけ理由がはっきりしないならば新しい提案をする、ということを繰り返していました。教員集団も新しい試みをするのを意気を感じて取り組んでいました。ぼくより年輩の先生に助けられたし、優れた実践もされていました。若い先生の中にも、誇りを持って仕事をする教員たちがいて、それぞれ専門の分野に見解をもてるぐらいの人もいました。教員集団が研究的であったことが最大の財産であり必須条件でしたね。

「たしかな力をつける保育」は多くの親に受け入れられ、入園希望者も多くなりました。保育界でも保育運動からも関心が高かったです。雑誌などメディアにも取り上げられましたし、自分たちの仕事は社会的に意味があるのだ、という誇りをもって仕事をしていました。親たちの関心も高く、協力的でした。実践を伝えることを大事にしていて、何人かの教員は学級通信で実践を伝え、ぼくは園通信を週1回ぐらい出していました。

保護者会を親和会といいます。その自主活動はとてもさかんでした。人形劇、合唱、読み聞かせといったサークル活動や、ぼくの教育講座を行っていました。ある年はその話を原稿にして出版して欲しい、という話もありました。ついですが、当時のぼくの最大の関心事は子どもの生活づくりというテーマでした。

ぼくは今振り返るとワーカホリック状態だったわけですが、開拓的で創造的な仕事の実現していく生きがい支えだったのでしょう。

太田 長時間、どうもありがとうございました。

[語り手：あきの かつのり 聞き手：おおた もとこ／あさい さちこ]

秋野勝紀は、和光・和光鶴川幼稚園のカリキュラムが洗練されつつ定着していった時期に、その中心となって活躍した教師である。その話は、和光・和光鶴川幼稚園の歴史をたどる上でも、現在のカリキュラムについて考える上でも、興味深いものだった。

とりわけ印象的だったのは、以下の点である。

一つ目は、女性化された幼稚園文化の問いなおしである。男性保育者である秋野は、教師や女の子の女性的な振る舞いや家庭の子育てのような活動に違和感を覚える。女の子たちは、正座以外の座り方をしない、スカートをはくといった慣習によって活動を制約されていた。先生たちは、頭に「お」を付けた美化語を使い、子どもたちをあいまいな言葉で誘導していた。子どもたちの身体活動は狭い範囲で行われ、思い切り体を動かすことはなかった。そして活動の中心は、室内で行われる手遊びやままごと、伝統的には家庭で祝われてきた季節の行事だった。

秋野は子どもの活動範囲を広げることから改革を始めたという。水を入れた砂場で遊び、運動場を駆け回り、「バドゲリ」に興じているうちに、女の子の服装はスカートからズボンに変わっていった。手遊びや伝統行事など、それを行う理由が説明できない慣習的な活動も、男性保育者ということではいぶかしげに見ていた親たちも、秋野の方針に理解を示し賛同するようになった。秋野は美化語を用いなかったことについて、それを用いる感性が自分の中になかったと語っている。その他のことについても、彼は男性として育った自らの感受性に依拠して振る舞うことによって、幼稚園教育のあり方を改革してきたといえよう。

今の和光・和光鶴川幼稚園の様子からは、教師が美化語を使用したり子どもを列ばせて移動させていた時代があったということは想像がつかない。女性化された幼稚園の空間とは異なる和光・和光鶴川幼稚園のあり方は、このような改革の歴史の上に成立しているのだということが分かった。

二つ目は、徹底した教材研究に基づくカリキュラム開発である。秋野の話によれば、1970年代の和光幼稚園では、言葉、数、木工、絵画、音楽など、幼稚園教育のすべての領域において民間教育運動と交流しつつ教材研究が推進された。その一端は、映画『みんなでうたう太陽のうた』に覗うことができる。

中でも圧巻なのは、スポーツの導入に関わる教材研究である。水泳、スケート、サッカーの導入と指導法の開発にあたり、秋野は体育教育の研究団体に参加し学ぶばかりではなく、自らその種目に取り組んでいる。サッカーに至っては、自らサッカークラブに入ってプレーし、小学生や中学生のクラブを指導し、幼稚園のお母さんたちのチームまでつくってしまう。休日は一日中サッカーという時期もあったという。着目すべきは、本物志向とも言うべき導入方法だろう。サッカー

に含まれる動きからその意義を確信したならば、子どもの活動もその本質に即して組まれている。ボールは痛くても皮のものを使用する。ゴムをはねて技術が向上しないからである。蹴ることよりもまず、ボールを扱う技術を教える。

今の和光・和光鶴川幼稚園にも、子ども向けでない、子どもだましでないという意味での本物志向が継承されているように思う。外部の文化とつながっていることの深みを、そのカリキュラムに感じる。しかし近年は、子どもたちが変化し、従来のカリキュラムに従った保育が困難になってきたと、和光・和光鶴川幼稚園の先生たちはいう。

秋野が行ったカリキュラム開発、すなわち「たしかかな力をつける保育」の創造は、1970年代の保育に対するニーズ、とりわけ親たちのニーズに応えるものだった。そのことによって和光幼稚園が親に選ばれる園となり、経営状況が安定したのは確かだろう。しかしそれは、学校で学ぶことの意義が自明であった1970年代だからこそ可能なカリキュラムであったように思う。1980年代末から学校教育を困難に直面させた問い、なぜ学校で学ばなければならないのかという問いから、おそらく幼稚園も自由ではなかった。だからこそ、1990年代になって従来の活動にのってこない子どもが増えたのだろう。

1990年代以降の学校教育の困難が、その公共的な使命の喪失によるものであるとするならば、教育の再構築は実は幼児教育において最も難しい。幼児教育はそもそも私的な親のニーズに応えるかたちで拡大してきているからだ。大都市を除けば公立が中心となっている小中学校と違い、幼稚園は私立が中心で、その教育は多様であり、どこに通うかは親が選択する。では多様な親のニーズにあわせて、それぞれの園で多様な教育が展開されればいいのか。そうではないだろう。幼稚園のカリキュラムも、公教育の一環として、民主的で平等な社会の実現を志向するもの、すべての子どもたちの幸福を保障しうるものでなければならない。むしろその場合でも、園ごとに多様な保育が展開されるだろうけれど。

幼稚園の改革の道は困難である。まずは、今を生きる子どもたちに応えつつカリキュラムを再編する必要があるし、実際に和光・和光鶴川幼稚園の先生たちは日々の保育の記録をとりつつ子どもと向き合いその教育を模索している。しかも少子化の中で、私立幼稚園は否応なく競争にさらされている。歴史をふまえることが、伝統あるカリキュラムの重みを強みとして生かす道につながるといいと思う。

秋野勝紀のインタビューは、延べ6時間に及んだ。2回ともレジュメを用意して諄々と話され、さらにインタビューのテープ起こしをもとにした整理原稿にも全面的に手を加えられた。その厳格な仕事ぶりは、インタビュアーをして改めて衿を正させるものだった。これまで和光幼稚園、和光鶴川幼稚園時代の仕事を振り返る機会はなかったと話しておられたが、時期的にちょうど良かったことは幸運だった。とくに印象に残ったことが一点ある。「早期教育」論にかかわって大きな検討課題を頂いたことだ。

秋野が和光鶴川幼稚園でカリキュラム開発を進めた1970年代は教育内容の現代化運動が日本に波及し、最先端の科学知や技術を初等教育においても発見的に学習させてゆくことが可能であるし、必要だと強調された時代であった。また民間教育研究運動も学力論争を経て、体系的な知識や技術の獲得を如何に助けてゆくか、実践者がカリキュラム開発の主体となって、活発に研究成果の発表と交流が進んだ時期であった。秋野は「ぼくの中には幼稚園の現場を学校教育としてみている感覚がありました」と語っている。幼稚園・小学校を連続する教育の過程として位置づけながら、幼児期の教育課題を探求できる背景が学園内にあったのだろう。

その際、秋野が「ぼくは子どもの自発性自体が社会的に作られるものであり、教員が意図を持って知的好奇心や行動を誘発するように働きかけることによって表面化すると考えています」と語る発達観は、とくに注目したい。この発言の前半、つまり子どもの興味や関心が社会的な性格を持つことは今日では保育界に共通する前提となっている。その点では、70年代に秋野が論争的な課題として意識していたよりも、依拠できる子ども研究の認識は深まっているであろう。しかし発言の後半部分、つまり子どもへの働きかけについては、今日の保育実践は全体としては、教師の直接的な指導や働きかけのウエイトよりも、媒介として自然物や遊具等の環境構成による間接的な働きかけや、年長の子どもの遊びや活動を見せておくことなどの人的な環境づくりに対して、より大きなウエイトをかけている。それは、子どもが中心的な興味や関心を形成するプロセスをじっくり経験させるという主体的な人格形成、特に「つもり（意思）」の形成過程を強調すべきだと考える背景が社会的に広がっているからではないかと思惟する。また、保育研究の中心課題が、教師の直接的な働きかけに集中しうる5、6歳児の保育だけでなく、2-4歳児へ、さらには乳児保育へと移動している事情も反映しているであろう。

人格形成は、形成 (formation)、教化 (indoctrination)、教育 (education) という三つの作用の組み合わせで進むと考えるとわかり易い。学校教育は、打てば響く発

達課題に対して上手に働きかけることを通じて、子どもの自発性を引き出しながら教えてゆく意図的な「教育」作用をその中心におく。それに対して、家庭や地域社会の生活は、大人の後ろ姿を見せ生活する中でモノやコトに関わって人格形成が進むという意味で、「形成」作用が重要な役割を果たす。(教化はここでは省略)

幼児教育は教育である以上、「誘導」と呼ばれる誘いかけの教育方法も含めて、基本的には意図的な働きかけを中心においている。しかし、「保育」となるとそうでもない。衣食住の生活を安定して進める中で、子どもを大きく育て、自然発生的な遊びを通じて、意欲も知性も育ててゆく。

とすると、最近の保育界が重視する「環境を通じた教育」はどちらに属するのだろうか。筆者は、形成と教育の作用が共存しているのではないかと考えている。つまり、誘いはするが子どもがそれに乗らなくとも良い、いつどの程度に教師の目的に即した活動が生まれるか、達成をすぐには求めない等々。こうした保育方法が重視されてきた背景には、家庭や地域での子どもの生活経験が多様化し、或は貧弱になっていて、打てば響く発達課題に大きなばらつきがあること、乳幼児は巨大な学習能力を秘めているので、むしろ幼稚園や保育所が豊かに形成作用を発酵できる場であることが、初等教育の基礎としても有効だという実践的な判断が保育者たちにあるのではないかと考えるのだ。

こうした視野から秋野の実践を聞くと、教師の意図的な働きかけのウエイトが今日の保育実践より相当大きかったのではないかと、という印象を受ける。自発的な遊びを発展させてゆく総合活動より、小学校の教科に繋がる課業的な活動に研究が詳しいという印象も受ける。

秋野が現場を離れた1990年代以降の保育現場は、「ゆとり教育」時代の「幼稚園教育要領」にリードされて、自由遊び中心の保育に傾斜を深めた。それが、近年再び「持続可能な社会」を支える学力形成に重点を移し始めたとも見える。そのようななかで、秋野の「早期教育」論をどのように理解するか、私たちはとても大きな研究の課題を頂いた。